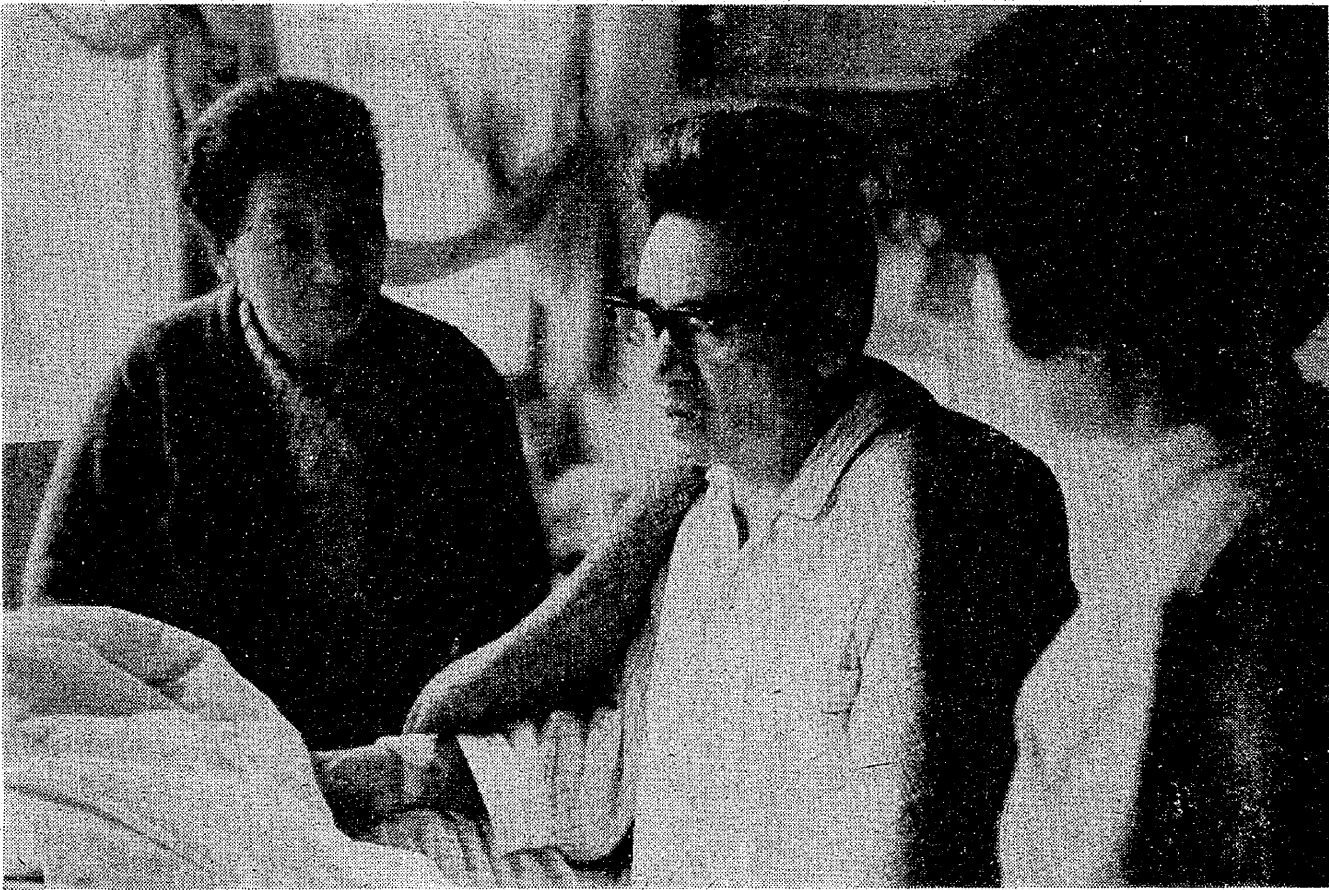


原告團

遺族・CO裁
判、災害責任
追求、特集号



点滴受けて

ドアをそつと開けて足を踏み入れると、そこは明るい病室だった。働く者の平ノ山病院。

部屋には、左と右と二列並に置かれたベッドが四つ。ＣＣ患者（一酸化炭素中毒患者の通称）限政市さんのベッドは、向って右側の、ひときわ明るい窓際にあつた。

たすねたとき「やっといま点滴を終ったばかり」と、じつじつとたた。

十二年間を

もちろん隈政市さんは、昭和三十一年十一月九日三井三池の三川鉱を襲ったあの炭じん大爆発（死者四百五十八人）で被災した、八百三十九人のCO患者の中の一人である。労災保険にもとづく長期傷病保障給付を受けながらの療養生活も、もう十二年という歳月を越えた。そして今もつづく点滴。

あの日以来十二年間、一分も、家の中に、かろうじてほのかな明

今日も点滴受けて……

一日二十四時間、襲いつづける中毒症

弘長の采配ふった身だが

くるつた頭

「見舞ってくれるだれもが、もうこれでおしまいだと思わぬ人はありませんでした」

焼けただれ

その日二番方坑内運搬工として出勤した彼は、その刻――午後三時十五分、四百五十メートル坑道

(海面下深さ四百五十メートルのところからこの呼称がある)で働いていた。一大音響とともに足もとの大地が揺れたかと思つたとな

ミチヨさんはそこから病室にひ
つかえしてきておどろいた。身動
きもまだままならぬはずの夫政市
さん、ベッドの上に座りながら、

間は泣きながら耐えたか。さうい
い平ノ山病院が設立されると同時
に、それこそ飛び立つ思いでここ
へ移ってきた隈政市さん。

火の燃焼すると云々といふは、何
ほどの広がりをもった平ノ山病
院の病室の白いベッドの上。

襲う中毒症

いまも交らずうち続く、CO中毒症——「頭重。頭痛。むくみ。疲れ易さ。めまい。耳鳴り。視力

減退。どうも、胃腸障害、冷え、四肢のしびれ、落汗、不眠、ひどい爆発性。いろいろ、もの忘れ。集中困難。意欲減退。抑うつ、ないな。

第二、一日二十四時間、全身をこかしを絶えず襲つてゐる。いろいろな激痛にさいなまれながら生きてゐる事実一つを見て、CO患者張政市さんの苦しみの度合いはわかるはずだ。妻シチヨさんの献身と、家族みんなの暖い思いやりがなかったならば、彼が果たして今日まで生き続けてゐることができたかどうか。現に彼がまだ三池保養院入院中のこと、同じ病院に入院していたCO患者仲間の一入——山鹿光明さんは、CO中毒の苦しみに耐え切れずついに自ら命を絶つて逝つた。

弘長も今は

かつては三川鉱の探炭夫の中でも、弘長として優れた采配をあつた経験さえもつ張政市さん。ハッパや撓や機械運転などの資格を手にするため、次つぎに国家試験にパスしていき、戦時中なら青年学校で勉強中、とくに國から模範國民としての表彰さえ受けた。

またあの三池闘争を仲間とともに闘い抜き、どんな職制の誘惑にも負けず、その後の恐るべき資本の差別支配と、日に日に激しさを加えていく合理化攻撃に対して不屈に闘ひ続けてきた彼。どうして三井独占のこれほどの重大犯罪を許しておくてよいものか。

彼の家は、大牟田市大字今山二一八八の三。とはいへ、彼の命の火の燃焼するところといへば、何ほかの広がりをもつた平ノ山病院の病室の白スミツツの上。

弘長も今は

かつては三川鉱の探炭夫の中でも、拡張として優れた采配をふつた経験さえもつ限政市さん。ハツパや撹や機械運転などの資格を手にするため、次つぎに国家試験にパスしていく、戦時中など青年学校で勉強中、とくに国から模範國民としての表彰さえ受けた。

またあの三洲闘争を仲間と云ふに聞い抜き、どんな職制の誘惑にも負けず、その後の恐るべき資本の差別支配と、日に日に激しさを加えていく合理化攻撃に対して不屈に闘い続けてきた彼。どうして三井独占のこれほどの重大犯罪を許しておいてあげたものか。

彼の家は、大牟田市大字金山一八八の三。とはいへ、彼の命の火の燃焼するところといへば、何ほどの広がりをもった平ノ山病院の病室の白いベッドの上。

